

何故なら具体出身の立派な、偉大な作家は沢山いるが、いまだに新しい未知の世界を開拓し、新しい現実運動を展開している中心に、嶋本先生は相変わらずいるということは、昔しも今も嶋本先生がそこにいることを意味している。

1987年7月、帰ってすぐ宮結準之助先生の個展の時、かの有名な菊畑茂久馬先生に逢て「今回、僕は嶋本昭三先生論を書くんだ」といそば、「そうりゃ、よかことばい、具体を支えているのは嶋本ばい」「そりゃ、そうじゃろう、僕は早ようから知つとりたい」「桜井さんは、よう知つとるなあ」と言ってくれた。ついでに「図式的に解釈すれば今泉省彦先生が一番強いことになるパイ。なにしろ美学校の先生経験者だけ集めても日本の前衛作家の歴史が成り立つもんなあ」と言ったものである。

もう一人の天才画家、オチ・オサム先生から電話があり「桜井さんいま何をしていますか？」というので「いま嶋本先生ば書いているたい」と言えば「嶋本が具体の本尊じゃもんネ。桜井さん、そりゃ書かねばならぬ」と、おほめの言葉をいただいたのである。

千葉成夫、現代美術逸脱誌には、「具体」の重要性が認識されてくるのはそれも初期「具体」の重要性がただしく把握されて認識されてくるのは、じつに1970年代に入ってからのことだった。しかも先鞭をつけたのは批評家ではなく美術家の彦坂尚嘉だった。P25とある。やはり美術家の方が敏感なのだろうか、とくに彦坂という先生は若い画家にしては偉大なものを持っていることはすでに知られている人である。とにかく嶋本先生個人まで到着したのかしないのか。ほかに千葉成夫先生の本には出ていない。しかし、菊畑、オチ両先生等は明確に、そのことは判っているのである。そして嶋本先生のすばらしさは表現力もさることながら、今日の世界状況に適応することがすばやい。もし必要であれば、1カ月もしないうちに一つ、二つの美術館を埋めつくすだけの仕事量である。私の考えるところ、真に国際的作家として必要なことは仕事のユニークもさることながら、的確に反応する仕事の早さではないかと思う。どんな作家でも国際作家としてデビューするとき、相当量の仕事をしていることはみれば明らかである。

そのことについて嶋本先生は、すでに達している。まさに世界の最先端に立っているのである。日本の立場は、すなおに現状をただ認めるだけでよいのである。ただ認めるだけでいいということは大変有難いことである。国際的に通用させようとするれば膨大な資金と見識がいるのである。それでも一つの冒険であることにはかわりはないのである。それにもかかわらず嶋本先生が国際的であるということは、いまだ、そんなもんがない状態、別言すれば日本のオートパイ、時計などのように嶋本先生の芸術は独占してしまい、ただ欧米の作家のアートメールの方が出遅れているからである。そして、より重要なことは、これはひとりの作家のものではなく、ジャンル、エコールドといった地層を意味し、もう一つの芸術、オリンピックでいえばアートメールという競技を加えたことになるのである。全然考えもおよばなかった、最先端の嶋本芸術なのであるだからこそ、嶋本先生がはじめて大学教授らしい態度をとることができた所以である。前衛とは売れないものを売ることであり、不可能に挑戦することである。芸術なのであるとするならば、到底、芸術だけでは

生活できないのである。それ故、欧米では最初から教授になる人もいるにはいるが、作品で有名になった芸術家を教授に招請するのである。それ故、日本の美術学校の教授と向こうの教授は自ずとパワーが違って来る。その意味から言えば嶋本先生は真の前衛作家であり、かつ前衛作家であるということの道がキワメテむつかしい日本において、数少ない稀有の前衛作家であり、現役教授という国際作家なのである。別言すれば前衛作家、たとえばスキャンダリストであろうとも教授になっていけないということはなく、かえって、なることによって芸術の革命即ち真の芸術に近づくことが出来るのではないかと私は考える。また、そんなスキャンダリスト達を芸術員会員にもした時、日本の芸術がやっと国際的になったと言ってよい時であろう。はたして、ここまで言うのはいいすぎであろうか。